

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむ
わざなる。(第十三段)

人は、おのれをつまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世をむさぼらざ
らんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。(第十八段)

人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけ
れ。(第五十八段)

すべて、何も皆、事の整ほりたるは悪しき事なり。し残したるを、さて打ち置
きたるは、面白く、息延ぶる業なり。(第八十二段)

吉凶は人によりて、日によらず。(第九十一段)

ある人、弓射る事を習ふに、双矢をたばさみて的に向ふ。師の云はく、「初心の
人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、始めの矢に等閑の心あり。毎
度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」と云ふ。(第九十二段)

友とするにわるき者、七つあり。一つには高くやんごとなき人。二つには若き人。三つには病なく身強き人。四つには酒を好む人。五つにはたけく勇める兵。六つには虚言する人。七つには欲深き人。よき友三つあり。一つは物くるる友。二つには医師。三つには智慧ある人。(第百十七段)

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは。(第百三十七段)

盗人を縛め、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢えず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。(第百四十二段)

天下の物の上手といへども、始めは不堪の聞えもあり。むげの瑕瑾もありき。されども、その人、道の掟正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、万人の師となる事、諸道かはるべからず。(第百五十段)

万の事は頼むべからず。愚かなる人は、深く物を頼むゆゑに、恨み怒る事あり。

(第百二十一 段)